

SHOW HEY シネマールーム

★★★★★

天外者 (てんがらもん)

2020 年 / 日本映画

配給: ギグリーボックス / 109 分

2020 (令和 2) 年 12 月 12 日鑑賞

TOHO シネマズ西宮 OS

Data

監督: 田中光敏

脚本: 小松江里子

出演: 三浦春馬 / 三浦翔平 / 西川貴

教 / 森永悠希 / 森川葵 / 内

田朝陽 / 迫田孝也 / 六角慎

司 / 丸山智己 / 徳重聡 / か

たせ梨乃 / 田上晃吉 / 榎木

孝明 / 八木優希 / 河原健二

ノバート・アンダーソン /

蓮佛美沙子 / 筒井真理子 /

生瀬勝久 / 宅間孝行

👁️👁️ みどころ

私の事務所近くの大阪証券取引所ビルの前に五代友厚の銅像があるが、坂本龍馬の“同級生”として幕末を駆け抜けた彼の功績は意外に知られていない。そんな彼に注目し、本作をプロデュースしたのは、私の旧知の大阪の弁護士。その「志」やよし！

今の若いモンは・・・？それは禁句だが、本作に見るW三浦の熱演による青春群像劇はメチャ面白い。そもそも、「天外者 (てんがらもん)」とは一体ナニ？

コロナ禍で“鎖国状態”がさらに強まっている令和ニッポンにあって、あの時代の若者たちの外向きのエネルギーをしっかりと吸収したい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■天外者 (てんがらもん) とは？五代プロジェクトとは？■□■

中国語も標準語と方言は全然違うが、それは日本語も同じ。もっとも、日本人なら誰でも大阪弁や京都弁は理解できるが、東北弁や土佐弁はもとより、鹿児島弁ともなると理解が難しい。しかして、『天外者』は「てんがいしゃ」ではなく、「てんがらもん」と読むそうだが、それって一体ナニ？『天外者』とは鹿児島弁で「凄まじい才能の持ち主」という意味らしい。本作の主人公は五代友厚 (幼名 五代徳助、通称 才助) だが、なぜ、本作はそんなタイトルに？

Wikipedia によると、本作は2013年に五代友厚の「志」を次世代に継承すべく、製作総指揮の廣田稔を始めとした市民有志が「五代プロジェクト」を立ち上げる形で制作された、そうだ。熊本県出身の廣田稔氏は私の旧知の弁護士で、2007年には『北辰斜にさすところ』(07年) (『シネマ16』278頁) をプロデュースしている。明治維新を成し遂げた後、政府の役人を辞し、大阪の実業家として大きな功績を残した五代友厚に、彼が目をつけたのは大阪の弁護士として実に達見！1946年生まれの際は1949年生ま

れの私より3歳年上だから、これが人生最後の大仕事になると思われるが、その「志」は立派なもの。「五代友厚プロジェクト」が目指すものは、「五代友厚の『思い』と『志』を次世代に継承していくこと、現代に活かすこと」だと書かれている。

連日コロナ騒動に慌てふためき、「桜を見る会」の追及にうつつを抜かしている近時の日本国では、まさにそれが必要だと私も同感！さあ、そんな「志」の結集によって完成した本作の出来は？

■□■1836年生まれの2人の“同級生”に注目！■□■

五代友厚は1836年生まれ。そして、坂本龍馬も1836年生まれだから、薩摩藩と土佐藩、藩こそ違っても、2人は“同級生”。坂本龍馬は、同じ土佐の中岡慎太郎との“盟友関係”が語られることが多いが、本作は薩摩藩の五代友厚を主人公とした上で、その盟友(?)として土佐藩の坂本龍馬を面白く絡めた青春群像劇だ。

似たような青春群像劇に『長州ファイブ』(06年)があったが、同作での“長州ファイブ”は、①井上馨、②伊藤俊輔、③井上勝、④遠藤謹助、⑤山尾庸三の5人だった。その前半では、1863年5月、すなわち1853年7月18日のペリー率いる黒船の来航からちょうど10年後に、この5人がイギリスに密航する、躍動感にあふれ歴史の勉強にもなる面白い物語が描かれていたが、残念ながら後半は多少“看板に偽りあり”だった(『シネマ14』330頁)。

また、武田鉄矢が片山蒼の名前で自ら脚本を書き、若き日の坂本龍馬を演じた『幕末青春グラフィティ 坂本龍馬』(82年)も、本作と似た青春群像劇だった。「サントリードラマスペシャル」として1982年11月16日に日本テレビ放送網で放映されたドラマはメチャ面白く、私はその後何度もビデオを見たものだ。

五代友厚は坂本龍馬と“同級生”だが、1867年12月10日に中岡慎太郎と一緒に31歳で暗殺されてしまった坂本龍馬とは違って、彼は1885年(49歳)まで生き抜き、①武士、②政府の要人、③実業家として、「日本を誰もが夢を持てる国にする」という、“自らの夢”を追う人生を駆け抜けていった人物。その銅像は私の事務所のすぐ近くの北浜駅前にある大阪証券取引所ビルの前に立っているのだから、私には馴染みの人物だ。彼の人生は、2015年のNHK朝ドラ『あさが来た』でも取り上げられたが、そこではあくまで波瑠が演じたヒロイン・あさが主役だったから、彼の人生は意外に知られていない。そこで、本作ではまず幼少時代の薩摩における彼の活躍ぶりを振り返ることによって、なぜ彼が薩摩で“天外者”と呼ばれたかを確認したうえで、本作全編にわたって、その「天外者」ぶりと、彼の夢の実現にかける執念と努力のサマを存分に楽しみたい。

■□■舞台は長崎！時代は1857年！21歳の五代は何を？■□■

薩摩の開明藩主・島津斉彬(榎木孝明)の下で、西郷隆盛(宅間孝行)や大久保利通(迫田孝也)ら若手有望株が抜擢されていたことは、2008年のNHK大河ドラマ『篤姫』でも描かれていた。本作を観れば、五代がこの1828年生まれ、西郷、1830年生ま

れの太閤の少し下の世代にいたことがよくわかる。あの当時の一般的な武士が開明派の藩主にすんなりついていけるはずはないから、お殿様から「世界地図から地球儀を作れ」と藩主から命じられた五代の父親・五代秀堯（生瀬勝久）が、「わかりました」と答えたものの、困り果てていたのは当然。ところが、父親とは違う視点から物事を見ることができる幼少の五代は一晚でそれを作り上げたから、まずは母親・やす（筒井真理子）が「この子はホントに天外者だ」と思ったのは当然。もっとも、五代のその才能を見抜いたのは母親だけで、薩摩武士の魂でゴリゴリの兄にはそんな才能は理解できず、「西洋かぶれ」の弟を敵視するばかりだった。

そんなエピソードの後、本作導入部の舞台は長崎になる。時代は1857年、本作は、当時2人とも21歳だった五代と坂本が大勢の武士たちから逃げ回るシークエンスから始まるが、それは一体なぜ？五代や竜馬の少し先輩の、兄貴分的存在として1853年のペリ来航に最初に興奮したのは、佐久間象山、吉田松陰、そして勝海舟（丸山智己）たち。その結果、1857年には長崎に海軍伝習所が造られ、勝海舟がそれを仕切り、坂本龍馬がその片腕になっていた。そしてこの時、薩摩から伝習生として派遣された若者の1人が五代だった。

「天外者」の本来の意味は「凄まじい才能の持ち主」だが、伝習所で気張っている五代の大言壮語を聞いていると、「天外者」のもう1つの意味は「大ほら吹き」とも解釈できる。そんな五代が偶然知り合った遊郭の遊女・はる（森川葵）に語った夢は、「たとえどのような人であっても、夢を見ることができるような日本を作りたい」ということだが、それって大言壮語？それとも・・・？

■□■ W 三浦の熱演は？それに絡む若者たちは？ ■□■

38年前の『幕末青春グラフィティ 坂本龍馬』は、坂本龍馬の熱烈なファンである若き日の武田鉄矢を中心に、吉田拓郎、井上陽水、もんたよしのりらのミュージシャン、さらには島田紳助、ビートたけしらのお笑い芸人が出演した青春群像劇だったが、2020年公開の本作では、五代役と坂本役を、三浦春馬と三浦翔平のW三浦が熱演！薩摩弁と土佐弁は本来聴解不可能な方言（？）だが、彼らのセリフは既に定着している有名なものが多いので、十分理解できる。2020年7月18日に主演の三浦春馬が急逝したことにはビックリだが、本作での彼の熱演はすごい。「俺の力で世界を変えてやる！」と言う五代の自負心（うぬぼれ）の強さは「天外者」と称された高い能力の裏返しだが、本人があまりそれを強調すると嫌味になることも多い。坂本龍馬もどちらかと言うとその傾向が強い（？）ので、本来、五代と竜馬は“違う種類の油”同士。したがって、場合によれば“水と油”と同じような“犬猿の仲”になる恐れもあるが、意外にも本作ではそんな2人が互いにトップを競う、良きライバルになっていくので、それに注目。

他方、導入部で、逃走中の五代によってお気に入りの万華鏡を壊されてしまった伊藤博文（森永悠希）とのエピソードも面白い。一晚で地球儀を作り上げた五代なら、壊れた万

華鏡を分解して組み立て直すくらいはチョロいもの・・・？剣道の腕前、英語の能力に加えてそんな器用さを併せ持った五代の多才さに感服！さらに、12月16日付の朝刊は一斉に、三菱創業150周年記念事業委員会26社が「三菱創業150年」の一面広告を掲載した。1870年に三菱の海運業を起こしたのは、本作で西川貴教が演じる三菱創業者の岩崎彌太郎だから、この男にも注目！

1857年当時の長崎で彼らが暴れ回っていたのは20歳そこそこの時代。したがって、一緒に牛鍋をつつくときは牛肉の取り合いになるのは仕方ない。しかし、そこで彼らが熱く語るテーマは、軍艦のこと、イギリスのこと、産業革命のこと、そして幕府のこと等だから、令和の時代に入った今ドキの若者とは大違いだ。前述した『幕末青春グラフィティ 坂本竜馬』と本作が描く2つの青春群像劇と、令和の時代を生きる今の若者たちの青春群像劇をしっかりと比較・対照したい。そして、W三浦の熱演と、それに絡む若者たちの姿を、しっかりと観察したい。

■□■薩英戦争から何を学ぶ？五代の支援者は？■□■

「長州ファイブ」たちのイギリスへの“密航”は1863年5月だが、その前年の1862年12月には、高杉晋作の命令に従って、井上馨や伊藤俊輔（博文）等が、品川御殿山に建設中のイギリス公使館の焼き討ち事件を起こしている。また、下関での長州藩による外国船（アメリカ船）の砲撃は、1863年6月25日。そして、急逝した兄・斉村の後継者になった弟の島津久光（徳重聡）の大名行列に遭遇したイギリス人が、騎乗のまま久光の駕籠付近まで近づき列を乱してしまったことに激怒した薩摩藩士らが、“無礼討ち”としてイギリス人に斬りかかり、1人が死亡したという「生麦事件」の発生が、1863年6月27日だ。

しかし、これら一連の長州、薩摩の過激派分子（？）による左翼小児病的（？）な“攘夷”の決行によって、長州も薩摩も外国からの痛烈なしっぺ返しに遭うことになった。イギリスの東洋艦隊が鹿児島湾に侵入したとの報告を聞いた島津久光が、「直ちに開戦じゃ！」と命令したことによって薩英戦争が勃発したものの、イギリス戦艦からの艦砲射撃の前に、薩摩はあえなく敗退。五代と寺島宗則はあえなく捕えられてしまったから、アレレ。

そんな五代を意外な方面から助けたのが、はるの身請け人になっていたイギリス人だった。しかし、貴重な捕虜経験（？）によって、五代はますますイギリスかぶれしていた（？）から、薩摩に戻った五代を、旧態然とした武士たちが、裏切り者、非国民扱いは当然。本作は導入部から幕末時代に武器商人として大きな役割を果たしたトーマス・グラバー（ロバート・アンダーソン）が登場するが、彼は坂本龍馬と同じように、五代も愛したらしい。そのため、竜馬亡き後もグラバーは五代への支援を続けたからえらいものだ。『孫文の義士団』（09年）（『シネマ26』143頁、『シネマ34』107頁）を観れば、日本の宮崎滔天が生涯孫文への援助を続けた姿がよくわかるが、グラバーはどんな気持ちで

五代への支援を生涯続けたのだろうか？ ささやかながら、中国人留学生への坂和奨学金を続けている私には、本作を観ているとそんなところにも多いなる興味が・・・。

■□■武士から役人へ！そして実業家に！それはなぜ？■□■

本作前半は激動の幕末期における五代らの活動が描かれるが、後半は明治維新の高官になった五代が大阪に赴任するところから始まる。前半ラストで遊女のはると死別した五代は、ここですぐに武家の娘・豊子（蓮佛美沙子）と知り合い、その後すぐに結婚しているから、彼は女にかけても手の速さは抜群だったらしい。また、ここでも、彼の殺し文句は「たとえどのような人であっても、夢を見ることができるような日本を作りたい」と語るからだから、彼の女の口説き方（？）は変化していない。しかし、幕末の時代に“尊王 vs 攘夷”の二択しか見えていなかった多くの武士と違い、五代には技術やカネが見えていたから、すごい。また、岩崎弥太郎もカネの計算にかけては五代以上だったから、明治新政府の下で平気で刀を捨てた彼らにさまざまな役割があったのは当然だ。

Wikipedia によれば、1868年に発足した明治新政府の下で、五代は当初①参与職外国事務掛に就任したが、同年2月からは大阪で、②外国事務局判事、外国権判事、大阪府判事、初代大阪税関長などを歴任。そして、③翌1869年5月に会計官権判事として横浜に転勤を命じられた後、2ヶ月で退官し下野したそう。彼が役人を辞めて大阪で実業家を選んだのは一体なぜ？本作では、それをじっくり考えたい。

本作では描かれていないが、五代には1881年に起きた北海道開拓事業に関する「北海道開拓使官有物払下げ事件」に関与していたという“黒い疑惑”が付きまとっている。この事件は、NHK朝ドラ『あさが来た』でも描かれていたが、実はこれは“誤報”だったらしい。ちなみに、本作の公開に合わせるかのように、2020年12月15日付産経新聞は「五代 政商説覆す」との見出しは、大阪市大同窓会が企画、PHP研究所が出版した『新・五代友厚伝』が五代友厚の政商説が誤報であることを明確にしたことを報じていたが、さて、その真相は？

五代を巡るそんな“黒い疑惑”問題を考えるにつけても、「桜を見る会」問題で揺れる安倍晋三前総理や、コロナ対応を巡って大きく支持率を落としている菅新政権の評価は、もう少し長いスパンで見る必要があるのでは・・・？

2020（令和2）年12月16日記